

---

# 東雲高校年間行事

カンガラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東雲高校年間行事

### 【Nコード】

N2865M

### 【作者名】

カンガラ

### 【あらすじ】

私立東雲高校めいうん 通称シノ校、市立東雲高校ちゅうりつとううん 通称イチクモ。片や有名進学校、片や有名不良校。しかし隣り合って立地する2つの高校にはある取り決めがあった。

ずばり、3年に1度、年間行事の全てを共に行うこと！

これは、シノ校生徒会とイチクモ生徒会が繰り広げる、愛と勇気と希望とお気楽さとお祭り気分と適当さがつまったお話である！！

## 顔合わせ編

「こ、ここが悪の巣窟、市立東雲とううん高校生徒会室：！！！」

帆崎ほな茶和ぢわはごくりとのを鳴らした。目の前にはどこにでもある薄汚れた白いドアが、ノブを回されるのを待っているかのように佇んでいる。はげかけた塗装が年月の長さを表している、ある意味年代モノのそれにじりじりと近づくと手は、なぜか細かく震えている。

「帆崎さん、ドアは噛み付いたりしないから」

「ドアは噛み付きませんが、開けた途端ドアの中の人間が噛み付いてきたらどうするんですか！？」

小声でどなりながら斜め上を見上げると、意外と近くに、大仏にしては綺麗過ぎるが、雰囲気が大仏のように穏やかな顔があった。ちよっとびびる。

頬をかきながら大仏様はのんびりと茶和を諭す。

「それに今年の役員はかなり優秀らしいよ。全校生徒をちゃんと纏め上げてる」

「つまり全校生徒を纏め上げるほど凶悪な生徒会ということですね！！！」

「まあ、そうとも言うね」

ははは、とフォローするのが諦めて頷いた大仏、もとい真北まきた宗二そうじ、現私立東雲とううん高校生徒会長は辺りを見渡す。そこには壁のそこいら中にスプレーで絵や文字が書かれ、ところどころに拳で殴ったような

跡がある。かすかにみえる茶色いものは血痕だろうか？

「しかし『イチクモ』、やってることがワイルドだね。うちの所の廊下とは大違いだ」

「感心しないでくださいよ…」

茶和は溜息を落とす。

私立東雲 しのめ 高校、市立東雲 とつうん 高校。2つの学校は向かい合って存在している。漢字だけ見れば全く同じ名前だが、学校のレベルから生徒の質まで、まるで反対で有名な2校の存在は、県下で知らない者は赤ん坊が引きこもりぐらいだ。

私立東雲高校くしりつしのめこうこう、創立100年を超える古参の有名校である。その学力レベルは県下でも指折りのもので、多くの旧帝大現役合格者を輩出するほどだ。私立なだけあって学費もろもろは高めだが、それを考慮しても入学を希望する学生が絶えない。学生自身も品性方向な性質の人間が多い、優良花丸高校である。地元民には『シノ校』と呼ばれている。

そしてもう片方の市立東雲高校くしりつとつうんこうこう、通称『イチクモ』と呼ばれる方はいえは…俗に言う不良が毎年多く入学する、県下でも問題校として有名であった。窓ガラスは毎日のように割れ、教師と生徒は日々戦い、授業は受けている生徒の人数の方が少ない。色とりどりの頭をした思春期の子どもたちが集まるイチクモでは、力が強いものが覇者となる。その頂点に立つのが生徒会長なのだ。

茶和はごくりと喉を鳴らす。

目の前のドアにかかっているプレートには『生徒会室』と書かれていた。

「ししし失礼します!!」

「あ、ちょっと帆崎さん…」

茶和は必要以上にどもりながら生徒会室の扉を勢いよく開ける。宗二はそれを制しようとしたが、それよりも一瞬早くドアは開かれた。

二人は現れた景色に目を丸くする

「うっわ…」

例えて言うならビルの山、山、山。チリも積もれば山となる、そんな古人の言葉を体現したような光景が目の前に広がっていた。それが中心にある長机だけでなく床にまで散らばっている。シノ校ではありえないほどの書類の数に二人は目をみはった。

「だー、クソ。終わらんねえ…」

ただただ呆れて声も出ない二人を現実に戻したのは、かすれたようなざらつとした声だった。

「窓ガラス破損? いつの窓ガラスだよ。昨日も割れたじゃねえか。そんなこと一々報告してくんな」

がしがしと頭を掻く青年はそう言いながら、右手に持っていた判子を紙の端に朱印して、後ろにあるダンボールの中に投げ込んでいく。左手はもう次の書類を引き寄せている。

「お次は…トイレのデコレーションについて？却下」

今度は紙を丸めて隣においてある市指定のゴミ袋の中に放り込んだ。神業としか言いようがないほどの速さで書類の山を消化していく青年は、まだ二人に気付いた様子はない。茶和と隆基は困惑して顔を見合わせる。

「あの…」

「りゅーちゃん、今誰かお客様の声しなかった？」

宗二が掛けようとした声にかぶせるように、二人が入ってきたドアとは違う所からひよい、と顔が出た。どうやら2部屋続きになっているらしい。

「知らん。聞こえん。聞きたくない」

「またそんなワガママ言っちゃって」

うふふ…そんなかわいらしい声を出しながら青年に近づいていくのは、目も当てられないほどの美少年だった。

小柄な体にさらさらの黒い髪に同色のぱっちりとした瞳、女の子なら誰だっただあこがれるばしほのまつ毛に桜色の唇。ズボンをはいているので男だとかろうじて分かるほど中性的な美貌をもつ少年は小首をかしげて『りゅーちゃん』の頬を文字通り、指でぶっ刺した。

「ぐあ…」

これにはさすがにこたえたらしく、頬を押さえて悶絶する青年を見ながら少年は唇を尖らせて文句を言う。

「お客様が来たときはちゃんとお相手しなさい、って何回もいったでしょ？りゅーちゃんがグータラのんべんだらりん人間なのは知ってるけど、こいつた常識って案外大事なんだからね！」

め、とかわいらしい顔をして今度は人差し指でおでこを弾く。同時に首から嫌な音がして、青年はぐらりと体を傾けて椅子から転げ落ちた。後ろにあった書類のダンボールに頭から突っ込んだ彼はそのままぴくりとも動かなくなる。

どうやら気絶したようだ。

「あーあ、また気絶しちゃった？相変わらず虚弱体質なんだから」

美少年は床に倒れた青年を片手で引き上げて壁にもたれかけさせた。そして唾然としてコントのような非現実な世界を垣間見た二人になっこりと微笑んでみせた。

「で、どちらさまでしょうか？」

「どーぞ」

「ありがとうございます」

「いーえいえ。こちらこそ、こんなムサイところにわざわざ来てもらって、ありがとうございます！って感じだよ」

とりあえず隣の部屋に席を移した4人は、にこにこ愛想をふりまく美少年、もとい座間祐史（さま ゆうし）と名乗った少年からお茶を受け取った。綺麗な緑色をした緑茶をすすりながら、ちらりとさつきまで昏倒していた青年を眺める。

ぼさぼさの鳥の巣頭は顔の半分を覆い隠し、鼻から上がどうもはっきりしない。なのに表情が豊かに見えるのはなぜだろうか。時々あー、うー、とうなりながら頭を押さえているのは、きつとそこにたんこぶができているからだろう。ちらりと袖から覗く腕は、失礼ながら男性としては細く、虚弱体質というのもあながち嘘ではないのかもしれないと思えた。

「だー、痛え」

そんな彼、こちらは座間劉己（さま りゅうき）と名乗った。なんと美少年のお兄さんで、しかもこの高校の生徒会長だそうだ。正直言っとうさんくさいことこの上ない。青年は視線に気付いた様子もなくそう呟いて、恨みがましそくに隣に座った祐史に顔を向けた。

「お前、そうやっていちいち暴力に訴えるの止めるよな。やるなら  
亨貴（こうき）にしるよ」

「こーちゃんは大きすぎて手が届かないから無理なんだよね。その  
点りゅーちゃんはちょうどいい高さにあるし」

「うっわ。うぜ」

不機嫌そうにお茶請けとしてだされたクッキーを口に放り込むと、  
それつきり劉己は黙り込んだ。祐史も気にした風もなくにこにこし  
ながらお茶を飲んでいる。どうでもいいが、お茶にクッキーとは組  
み合わせとしてはどうなんだろうか…茶（ちや）和は沈黙に乗じてそんなこ  
とを考える。

たしかにこのクッキーは非常においしいし、お茶自体もおいしい。  
だがお茶は和式、クッキーは洋式のものだ。微妙に絶妙な不協和音  
を奏でてしまうのはいかしかたないのではないだろうか？

「あの…よろしいですか？」

せめて牛乳だったらよかったのに。

そんな思考を遮断するように声をだしたのは真北宗二くまきたそう  
じ>、シノ校の生徒会長だった。

菩薩のような微笑をうかべる彼に、頭をさすっていたイチクモ生徒  
会長はやつと視線をむけた。

「あ？なにが？つか今さらだけどさ、なんでシノ校のヤツがうち  
の学校にいんの？」

本当に今さらな疑問である。そのことばに、宗二の菩薩の笑みが困  
ったようなもの変わる。

「今日、そちらにうかがうと手紙をだしたのですが、届いていませんでしたか？」

「手紙？そんなん受け取ってねえぞ？」

劉己は辺りを見渡した。白い書類がそこら中に飛び散っている現状では、手紙一つ見つけるのも困難だろう。

彼も早々にそれを悟ったらしく、諦めたように顔を戻す。と、なぜか隣に座っていた祐史が全員から視線をずらした。

なんとなく嫌な予感がする。

「祐史、まさかてめえ……」

「うーん、まさかあの手紙が本物だったなんてびっくりだよ。新  
手の果たし状かと思ってすてちゃった。ごめんね」

3・(後書き)

サブタイトル：届かなかったラブレター 編 でした

申し訳なさそうに、てへ、と小首をかしげる祐史の姿は非常にかわいらしいもので、茶和は一瞬クワリと頭が揺らいだ。しかし、長年一緒に育った彼の兄でもある劉己は、その魅力に流されることなく、逆にちやぶ台をひっくりかえす勢いで立ち上がって怒鳴った。

「てつめえ！！アレだけ手紙とかの類は机の上に置いとけ、って言っただろうが！！！！」

鼓膜を震わすような音量と剣幕に動じることなく、祐史はかわいらしく唇を尖らせた。

「だってだってだって、うちんどこに来る手紙ってチラシと脅迫状と怪文書ぐらいなんだもん。今回はちよつと捻ってシノ校名義で送ってきたのかな、って思うのは普通でしょ？」

「だってもくそもへちまもねえー！！！！」

劉己は両手で頭を抱え、そしてそのままソファに沈み込んだ。それに追い討ちをかけるように祐史が言葉を続ける。

「それにさ、りゅーちゃんが『自分がいないときもちゃんと手紙とが見なさい』っていうから、めんどくさいけどちゃんと手紙チェックしてたのに、その態度はひどくない？」

腰に手を当てて怒る姿を、薄茶色い頭が力なく見つめる。その姿は

まるで路上で缶拾いをしている浮浪者のようで、見るもの全てに哀れみを感じさせるのには十分だった。

「見るとは言ったが捨てるとは一言も言っただけよな？」

「空気読んでみたの」

「…お前、小さな親切大きなお世話、って言う言葉知ってるか」

「この件に関してはその言葉の使用を禁じます」

拳手をしながらそんな暴言を吐く祐史を、茶和は心底凄い人だと思った。だがいわれた本人にとっては溜まったものではない。劉己は机に拳を叩きつけながら喉から搾り出すようにしてうなるように怒鳴った。

「こんのチビすげが…!!」

「りゅーちゃん？僕謝ったよね？それぐらいにしないと怒るよ？」

「ゴメンナサイ」

にこにここと笑いながら劉己の髪の毛をわしづかみにする祐史。どうやら逆鱗に触れたらしい。ぶちぶち、という音は髪の毛が抜けていく音だろうか？

「分かったらいいんだよ、分かったら」

「あの」

うんうんと満足そうに頷く祐史と、抜けていった髪の毛を悲しそうに見つめる劉己に、宗二そじはもう一度声を掛けた。たぶんこちらから話を進めなければ、このコントまがいの見世物がえんえんとつづくことが分かったのだらう。二人も同時にこっちを向いて、バツの悪そうな顔をした。

「ごめんね。ついついもの癖で」

「いいえ、仲のいいことは良いことですから」

「お前の目は節穴だ…これのどこが仲が良かったんだ…オレの髪の毛…」

にこやかな二人の会話を聞いて、劉己は小声で非難する。見つめる先は自分の手のひらの髪の毛だ。それほどまでに髪の毛の恨みは深いらしい。

「会長には世の中全員善人フィルターがかかってるんです」

「限りなく無意味なフィルターだな。性善説か？あいにくだが、うちんとこの祐司は根っからの悪魔だ」

「りゅーちゃん？」

「ゴメンナサイ」

わきわきと動く手に青ざめながら音速の速さで顔を逸らした劉己は、リアットのような力技で話題を変える。

「まあ、そんなことで悪いんだがこっちでは全く今日の話の内容が

把握できてない。すまないんだが、また後日にするか、今分かる範囲で話をしてくれないか？」

「苦しい話の転換ですね」

「黙れ小娘」

「こむ…!..」

さつきまで怯えていた人物とは思えないほどの傲慢な口調に今度は茶和が立ち上がって怒鳴りそうになる。それを腕を引いて押さえながら、宗二はあわてて話に同調する。

「分かりました。幸い、今日はこちらから資料も持ってきていますので…帆崎さん、資料をだしてもらえるかな？」

「あ、は、はい!..」

宗二の大仏のように必殺！菩薩ビームを受けて、茶和はあわてて力バンから何枚かの資料を取り出した。資料の表紙には『年間行事予定表』と大きく書かれている。

「…なんだこれ？」

「年間行事予定表です」

「そりゃ見りゃ分かる。それをどうしてここに持ってきたのかを聞いているんだ」

「なんでって…」

君鷹と茶和は顔を見合わせる。

「来年度が合同年間行事の年だからですが」

「なんだそれ」

4人之間に間抜けな沈黙が部屋に流れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2865m/>

---

東雲高校年間行事

2010年10月14日12時44分発行